

第38回 長野県知的障がい福祉大会 実施報告

大会スローガン 気づいて築く

～社会の当たり前を 私たちの当たり前～

大会趣旨

障害者権利条約の批准に向けた障害者基本法を始めとする法律・制度等の改正、成立は、障がい者福祉のあるべき姿を明確にすると共に、私たち支援者の支援のあり方をも大きく変えようとしています。

また、利用者の高齢化・重度化に加え、自閉症等強度行動障がいのある人、難病者への支援等、私たちは、一人ひとりの幸せづくりに向けて生活環境の改善とライフステージに応じた多様なニーズに対して関係機関や地域と連携したより専門的な質の高いサービスを継続的に提供することが求められています。

なかでも、意思決定支援を含む権利擁護への取り組みは、私たちの存在の根幹をなすものであり、個別かつ具体的な実践が期待されています。

私たちは、本大会が当協会の日々の実践・研究の公開の機会として今日的な課題を取り上げると共に、利用者が本大会に主体的に参加することによって、関係者のみならず、地域の人々が互いに考え、障がいのある人の理解を通じて共生社会の実現に取り組む大会とすべく開催しました。



開会



宮下大会長挨拶



歓迎の挨拶 岡谷市長 今井竜五様



祝辞 県健康福祉部長 山本英紀様



会場の様子



ポスター&冊子の原画



ポスター&冊子絵作成者の表彰



冊子絵作者 大野光子様



ポスター画作者 加藤征央様(代理)

全体会

朝霧 裕さん ♪トーク&コンサート♪

プロフィール

1979 年埼玉県生まれ。愛称は「ダッコ」。筋肉の難病ウェルドニッヒ・ホフマン症のため、車椅子の生活。24 時間の介助サポートを得てさいたま市にひとり暮らし。シンガーソングライターとして、コンサートやライブ活動、学校公演を行うかたわら、エッセーを執筆。「障がいの有無、世代を問わず、誰もが輝ける社会」を夢として、書き、語り、歌う。

トーク&コンサート (要旨)

「今日はこのパンツを履きたい！ でも母が履かせてくれるパンツは違う色のパンツで…。違うけれど履かせてくれるからわがまま言えないな」と 21 歳までは母の選ぶ服を着る生活をしていました。

私の病気は「ウェルドニッヒ・ホフマン症」という進行性の筋肉の難病です。色々なことがあって、22 歳の時に 24 時間の介助を受ける体制が整い、ひとり暮らしを始めました。障がいを持って生きることは、衣食住や人に会うこと出かけることはとても大変なことです。でも 16 年の間に色々なことが変わって、外に出かけられるようになり、埼玉県から長野県に来て堂々と語るできるようになりました。

今日、私の講演では手を振ったり歌ったりエクササイズできるような時間にしたいと思います。障がいのことって腫れ物に触るような、言ってはいけないような印象ですが、何でも聞いてください。

ギターリスト：奥野雄介さん…25 歳から一緒に活動を始めて 11 年目になる。

曲名「ハロー」

私がいた埼玉県の養護学校には言葉で会話をするができる人もいれば、重度重複障がいという身体にも知的にも障がいがある方もいました。重度重複障がいの人と会話はできなくても、笑ったり泣いたり怒ったりする姿を見て凄く感動しました。一生懸命表現している重度重複障がいの人に、共感する教師もいましたが感じない教師もいました。障がいは、誰がつくっているんだろう。障がいとはなんなのだろう。でも障がいがあって“人と違うことはカッコいいことじゃん！”、と思います。

私は高校を卒業したら“ひとり暮らししたい”“ライブハウスに行きたい”“歌を歌いたい”という夢がありました。それを進路相談の先生に話したら、「あなたはトイレも行けない、お風呂も入れない、服も一人で着られない、そんなあなたがひとりで生活できるわけがない。入所施設に入りなさい」と言われました。でも今の私があるように『ひとりで生活ができるんだよ』、と社会に発信していきたい。

曲名「スターツアーズ」

介助さんに支えられる生活に変わると好きな生活ができるようになって、お茶やジュースを飲んでトイレに行けるようになった。我慢する必要がなくなったのです。一人暮らしは楽しいですよ。いっぱい恋していっぱいフラれてきました。インターネットを通じてギタ

一を募集したときに釣れたのが奥野さんでした。次にお友達になったのは侍みたいなカメラマンのみよしさんでした。二人に支えられて色々なライブハウスに行きました。ライブ活動をとおして色々なお友達ができました。

曲名「愛の告白」

東日本大震災のとき、池袋駅にいて大きな横揺れに遭いました。介助さんと手を握り合っ
てしゃがみこんでしまった。死にたくないと思いました。揺れた瞬間に駅の構内のエレベ
ーターが全部停止してしまいました。本当に命が懸かったとき、障がいを持っていたら困
るということを改めて思い知らされました。地震のときどうやったら助けてもらえるのか。
一緒に生きていきたい、もっと伝えなくちゃ、って。

次の詩は 2016 年 3 月 16 日に書いたものです。

曲名「さくらの国」

心を含めた本当のバリアフリーがやっと幕を開けると思っていました。震災から 5 年経っ
て皆が助け合うような時代になってきたのに、また閉塞気味な時代になってきていると感
じています。やまゆり園の事件のように、障害がある人をいじめたり殺したり虐待をし
たり、事件は後を絶ちません。凄く悔しいです。今は 1 年間で自殺をしてしまう人が 3 万人
を超え、10~30 代の自殺はその内の 33% もいるんですって。ストレスフルな社会がそうさ
せてしまうようです。でも違います。障がいがある人ない人、困ったことがあったら助け
合っていていいんですよ。パラリンピックに出ているような車椅子の選手などが町の中でどん
な生活をしているんだろうって、メディアに取り上げられることがまだまだ少ないです。
もっと取り上げられていけばいいなということが私の願いです。

曲名「あなたとつながる前まで」

やまゆり園の事件では、亡くなった方が園でどんな生活をしていたのだろうと、メディア
はもっと取り上げてほしかった。私は障がいを持つ人として生きていたんだよ、という生
き様があってもいいんじゃないかなって思います。障がいを隠しているようで…、
隠してほしくなかった。

自分と誰かに向かって作った詩です。

曲名「陽の下に咲く花」

私たちの年齢になってくると心配になってくことは親無き時代になったらどうしよう
ということです。もう私は介助さんや友達と生き延びようと思います。命がけで助けてもら
おうと思っています。いっぱい助けてもらっている命だから返していきたいと思います。
長生きをして皆で車椅子になったところを見たい。100 歳のときに「超楽しかった」と言え
る生涯にしたい。最後の歌は今と未来に向けての祈りの歌です。

曲名「手から手へと」～「名前から名前へ」

今日は短い間でしたが結構しゃべりました。今日は初めてここに来ることができました。
嬉しいです。ありがとうございます。



会長から紹介



やさしいトーク



熱唱



奥野雄介さん



ロックンロール



バラード



飛び入り



花束贈呈



お別れ